

農産加工場建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

上 林 遺 跡 2

2 0 1 4

石川県野々市市教育委員会

例 言

- 1 本書は、上林遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の所在地は、石川県野々市市上林二丁目地内である。
- 3 発掘調査原因は、農産加工場建設こともなうものである。
- 4 発掘調査にかかると費用は、(株)ぶった農産と野々市市が負担した。
- 5 発掘調査は、(株)ぶった農産からの依頼を受けて野々市市教育委員会が実施した。
- 6 現地調査は平成25年度に実施した。期間・面積・担当者は以下のとおりである。

・期 間 平成25年11月2日～平成25年12月26日 ・面 積 760㎡
・担当者 永野勝章(野々市市教育委員会文化振興課 主査)

- 7 出土品整理、及び報告書の刊行は平成25年度に野々市市教育委員会が実施した。担当及び執筆・編集は田村昌宏(野々市市教育委員会文化振興課 課長補佐)が行った。
- 8 出土品写真撮影及び報告書編集補助は、菊地由里子(野々市市教育委員会臨時職員)が行った。
- 9 本書についての凡例は以下のとおりである。
 - (1) 方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T. P. (東京湾平均海面標高)による。
 - (3) 出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真に対応する。
 - (4) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。
 - (5) 遺構名称の略号は以下のとおりである。
竪穴建物：S I 掘立柱建物：S B 溝：S D 小穴：P
- 10 調査に関する記録と出土遺物は、野々市市教育委員会が一括して保管・管理している。

目 次

第1章 経緯と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第3章 基本土層	3
第4章 遺構	3
第5章 遺物	4
第6章 総括	4

第1章 経緯と経過

上林遺跡発掘調査業務は、上林二丁目地内における農産加工場建設に伴う事業を調査原因とする。平成24年6月、(株)ぶった農産から野々市市教育委員会（以下、市教委と称する。）に上林二丁目地内で農産加工場の建設の打診があった。建設予定地は埋蔵文化財包蔵地であったため、市教委は同年11月10日に試掘調査を行い、3ヶ所のトレンチを開けたところ、3ヶ所ともに遺構が確認され、全域に遺跡が存在することがわかった。農産加工場の建設については、埋蔵文化財に影響を及ぼす掘削工事であったことから、事前に発掘調査を実施して対応することとなった。

上林遺跡の発掘調査については、平成25年9月30日に、石川県教育委員会に埋蔵文化財包蔵地における土木工事取り扱いの手続きを行い、10月14日に県からの承認を得た。その後、11月2日より発掘の現地調査を開始。大型掘削機で表土を除去し、その後、人力による遺構掘削を行い、12月26日に完了した。出土遺物の整理については、平成26年1月23日より出土遺物の洗浄を開始し、一部遺物の実測作業を実施し、遺物写真撮影及び執筆作業を経て、平成26年3月28日に発掘調査報告書を刊行した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

野々市市は石川県のほぼ中央、石川平野の要地に位置する。市の大きさは南北約6.7km、東西4.5kmで、県内で最も面積の小さい自治体である。市域は霊峰白山を源とする県下第一級河川手取川によって形成された手取川扇状地の北東部にあり、扇状部と扇端部の狭間に位置する。本市で最も高い標高地は50m、最も低い地点は10mで、なだらかな緩斜面となる地勢をみせている。今回の発掘調査地である上林遺跡は、標高約44mと市内でも標高の高い地域で、手取川から派生する小河川によって形成された微高地上に立地する。



第1図 野々市市位置図

第2節 歴史的環境

手取川扇状地扇端部にあたる野々市市の北部は、国指定史跡となっている御経塚遺跡をはじめとする縄文時代後期～晩期の遺跡が集中する。これは、この地が扇状地の地下を流れる豊富な伏流水の湧水域であり、落葉広葉樹など豊かな林野が広がるといった、当時の人々にとって生活環境に最適な場であったためである。農耕社会となる弥生時代に入ってもこの様相は変わらず、水と耕作に適した土地の確保が困難な市の南部域には人々の生活の痕跡はほとんど見せず、市北部地域に限定されていた。

しかし、古墳時代後半には、ようやく市内南部域の扇状地扇状部に人の手が入ってくるようになり、7 上林古墳や9 末松古墳など後期古墳が築かれるようになる。これは、鉄器など道具の技術向上などから、河川上流域における耕作地などの開発が広がり始めていたことを意味する。

7世紀後半には、市内南西部に、県内最古の古代寺院である末松庵寺が建立される。8 末松庵寺跡は、東に塔、西に金堂が置かれた法起寺式の伽藍配置をもち、この寺院建立以降、手取川扇状地扇状部一帯で耕作地開発が急速に進み、1 上林遺跡、4 粟田遺跡など周辺集落が増大していく。また、5 下新庄アラチ遺跡や6 上林新庄遺跡では、倉庫と思われる大型掘立柱建物の発見や仏具の出土から、政治色の強い集団が存在したと考えられる。

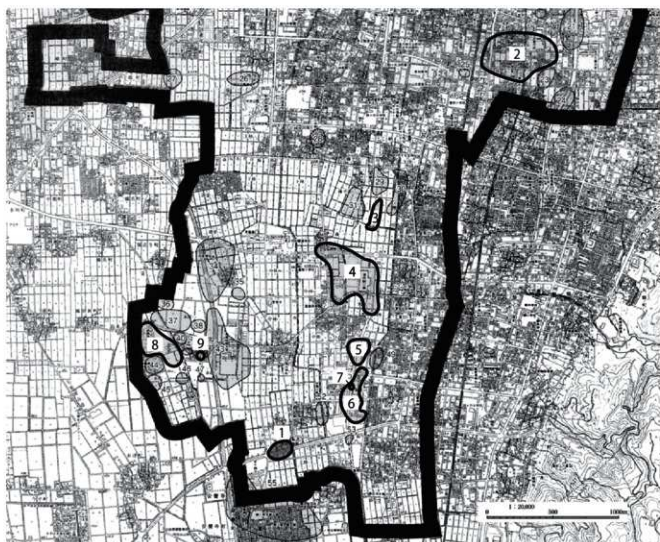
中世前半の11世紀後半～12世紀頃からは、在地領主層の武士団の形成が図られるようになった。地元武士団である林氏や富樫氏は、手取川扇状地での新開発や再開発に大きな影響を与えた。現在、市内においては中世前半の遺跡は多く確認されていないが、林氏の拠点地と推される下林、中林、上林には林氏の館など当該時期の遺跡が存在する可能性は十分にあると思う。市内で中世の遺跡が多く認められるようになるのは、富樫氏が加賀国の守護職に任じられる14世紀頃からである。富樫氏は守護所を市内住吉町、扇が丘地内に2 富樫館を築き、加賀国の政務を司っていた。市南部地域においても、3 三納ニヨサ遺跡や4 粟田遺跡など集落遺跡が各地で確認しており、昭和40年頃まで見ることができた村の周りに田畑が広がる農村風景の原型が、この頃から成立してきたと考えられる。

No.	遺跡名	時代
1	上林遺跡	弥生 古代
2	富樫館跡	縄文 中世 近世
3	三納ニシヨサ遺跡	縄文 中世
4	栗田遺跡	縄文 古代 中世 近世
5	下新庄アラチ遺跡	古代
6	上林新庄遺跡	古代
7	上林古墳	古墳
8	末松塚寺跡	弥生 古代 中世 近世
9	末松古墳	古墳

第1表 周辺の遺跡



第2図 調査区位置図



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第3章 基本土層

基本層序については、第4図の土層断面図を基に説明していく。1は現在の水田耕作土である。2の橙灰色粘質土は、1の水田耕作土に伴う整地層である。3の黒灰色粘質土は、古代から中世にかけての包含層に想定される。4の暗褐色粘質土は、古代以前の遺物包含層にあたり、その下の5黄褐色粘質土は地山層である。

1	灰色粘質土 (水田耕作土)
2	橙灰色粘質土 (水田耕作土の整地層)
3	黒灰色粘質土 (古代～中世の包含層)
4	暗褐色粘質土 (古代以前の包含層)
5	黄褐色粘質土 (地山層)

第4図 土層断面模式図

第4章 遺構

S I 1

調査区南東隅で確認した竪穴建物である。南北に長い長方形プランであるが、形状は大きく崩れている。方位はN13° Wで、後述するS B 5と同方位である。南北長約280 cm、東西長約215 cm、深さは地山面から約10～15 cmである。堆積覆土は暗褐色粘質土であるが、埴土や黄褐色粘質土のブロック土が散在して見つかっている。このブロック土はカマドの一部と考えられ、竪穴廃絶時に堆積土と一緒に埋まったものと思われる。竪穴底には、黄褐色土ブロック土混り暗褐色粘質土の覆土が薄く堆積している箇所がいくつも見られ、この覆土は貼床と想定される。貼床面より下部には、長さ10～40 cm、深さ5～25 cmのピットを複数確認した。ピットの中には柱穴に該当するものがあるかもしれない。

S B 1

調査区北西隅で確認した掘立柱建物である。建物の半分以上は調査区外へ延びるため、全体の様相はわからない。桁行3間(4m)、梁行1間(1.1m)以上の南北棟と考えられる。方位はN2° Eとほぼ真北に近い。柱間の長さは120～140 cm、柱穴は円形に近く、直径50～70 cm、深さ10～20 cmを測る。

S B 2

調査区南西隅で確認した。北西～南東が長い3間×2間の掘立柱建物で、方位はN17° Wである。南面梁行の柱は確認していない。柱間は桁行が約200 cm、梁行約250 cmであるが、桁行の南端部は約120 cmと短い。桁行約5.3m、梁行約4.7m、床面積約25 m²である。柱穴は、角が丸みを帯びた略方形をし、一辺40～80 cm、深さ12～33 cmを測る。

S B 3

調査区北東隅で確認した掘立柱建物である。建物の半分以上は北側調査区外へ延びるため、全体の様相はわからない。桁行1間(1.4m)以上、梁行2間(4.6m)の南北棟と考えられる。方位はN19° Wである。梁行の柱間の長さは230～250 cmで、柱穴の形状は略円形、直径35～60 cm、深さ33～41 cmを測る。

S B 4

調査区北東隅にある掘立柱建物で、前述のS B 3とは重複する。建物の半分以上は北東側調査区外へ延びるため、全体の様相はわからない。桁行2間(4.1m)以上、梁行3間(5.1m)以上の規模で、方位はN9° Eである。桁行の柱間の長さは200～230 cm、梁行の柱間の長さは約230 cmである。柱穴の形状は楕円形が主で、長径40～70 cm、短径30～45 cm、深さ19～45 cmを測る。

S B 5

調査区南東隅で確認した。北西～南東が長い3間×2間の掘立柱建物で、方位は前述したS I 1と同方位のN13° Wである。柱間の長さは、桁行が北から約200 cm、約250 cm、約300 cmとなり、梁行は北面が約160 cmと約260 cm、南面が約200 cm、約230 cmとなる。規模は桁行約7.3m、梁行約4.3m、床面積約31.4 m²である。柱穴は略円形をし、直径25～50 cm、深さ25～55 cmを測る。

SB 6

調査区南東隅で確認した掘立柱建物で、前述したSB5とは重複する。北西-南東が長い4間×2間の掘立柱建物であるが、東面は調査区外となり全体の様相はわからない。方位はN12°Wで、前述のS11、SB5とほぼ同じである。柱間の長さは、桁行が北から約280cm、約350cm、約330cmとなり、梁行は平均約260cmとなる。建物規模は桁行約9.6m、梁行約5.4m、床面積約51.8㎡である。柱穴は略円形をし、直径30~65cm、深さ27~46cmを測る。

第5章 遺物

本調査で発見した遺物は約170点で、内実測できたのは18点である。時期は弥生時代初頭と古代である。

1は弥生時代初頭の蓋片である。外面は条痕を形成している。2~15は古代土器で、2~10は須恵器、11~15は土師器である。2~7は坏、8、9は蓋、10は瓶である。2と4は焼成がややあまい。11~15の土師器は全て埴である。12と13の外底部は回転糸切り痕をもつ。14と15の埴は外面に赤彩、内面内黒を施している。また、15の外面には墨書が認められるが半読はできない。

16~18は土師器の石鍬である。1の弥生時代初頭の時期にはまると考えられる。16は大型の部類で撥型をしている。刃先が残っており未使用の可能性はある。17は短冊型で製作途中の未成品である。18は撥型で基部と刃先が一部欠失しており、使用途中に折れたものと考えられる。

第6章 総括

本調査で確認できた時期は、弥生時代初頭と古代の2時期である。

弥生時代初頭は、土器数点と石鍬3点の遺物だけである。石鍬の素材となる石は、扇状地扇尖部各地で散見できる河原石の集積地で採取しており、本遺跡から北東約1.5kmの栗田遺跡で採取地を確認できる。栗田遺跡では、母岩を剥離し素材を採取するだけで、石鍬の加工は別の場所で行われていたようである。17の石鍬は、市内遺跡でも事例のない未成品で、本遺跡で石鍬を加工していた可能性がある。

古代は竪穴建物1棟、掘立柱建物6棟を確認した集落の一部である。平成9年度に東南側で発掘調査して見つかった古代遺跡とは一連のものになる。時期は出土遺物から8世紀後半~9世紀前半と思われる。

本調査地の掘立柱建物SB1とSB2は本調査区の西側に位置し、竪穴建物S11とSB3~6は東側に集中する。調査区中央は、遺構密度が極端に低くなる空間地で、集落内の広場にあたると思われる。

SB3とSB4、SB5とSB6は重複しており、建替えが行われていたようである。また、建物の主軸が真北より西に触れるS11、SB2、SB3、SB5、SB6と、真北より東に触れるSB1とSB4に分かれる。このように、建物の重複と主軸の違いから、当該時期は大きく3時期に分かれると想定できる。

個別遺構の詳細な時期区分はできないが、S11とSB5は、建物の配置状況から同時併存したと思われる。S11は出土遺物等から8世紀後半と位置づけられることから、SB5と同じ軸であるSB2、SB3、SB6は8世紀後半から9世紀初頭、真北より主軸が東に触れるSB1、SB4は9世紀前半と想定したい。

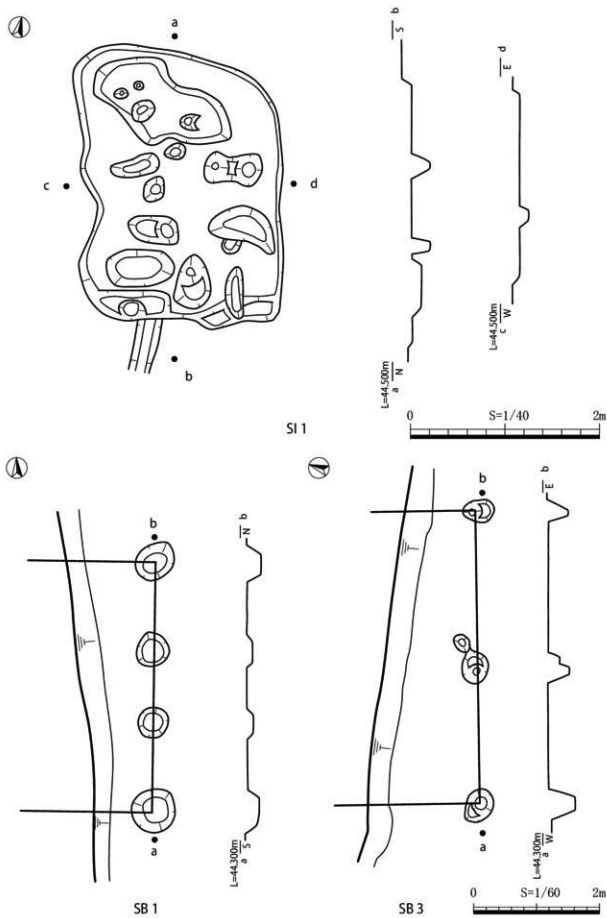
なお、平成9年度東南横の調査で確認した4間×2間の掘立柱建物は、9世紀前半に比定され、主軸は真北よりやや東に触れており、本調査のSB1とSB4と併存すると考えたい。

<参考文献>

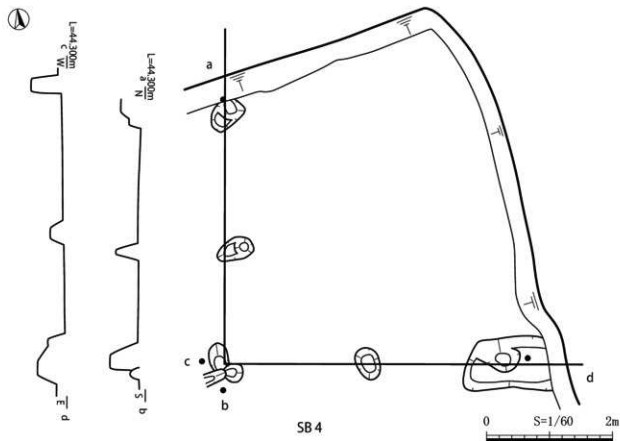
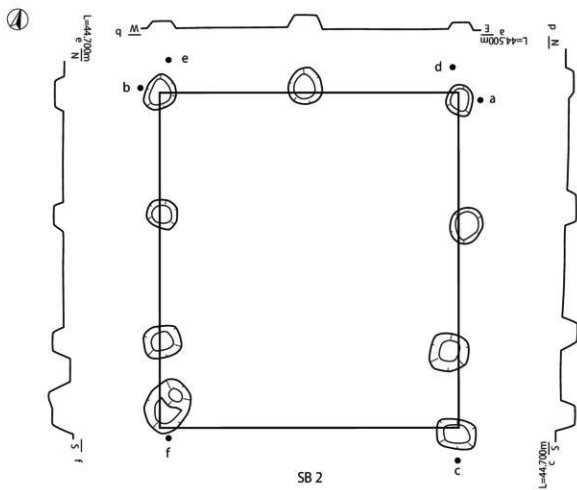
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）』北陸古代土器研究会
1998 『上林遺跡』(有)ぶつた農産 野々市町教育委員会
河合忍 安英樹 1999 『石鍬雑考』『石川県考古資料調査・集成事業報告書 農工具』石川考古学研究会
2003 『野々市町史 資料編1 考古 古代・中世』野々市町史編纂専門委員会



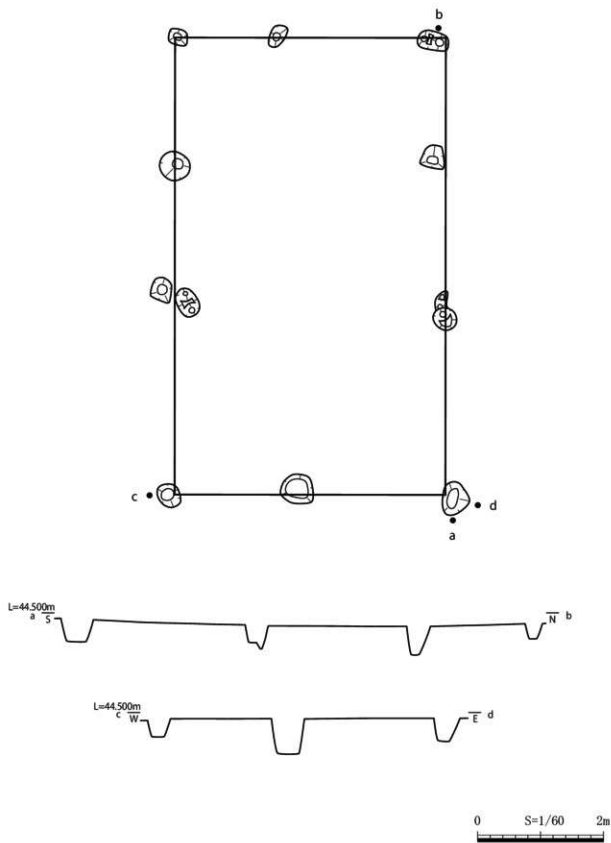
第 5 図 遺構全体図



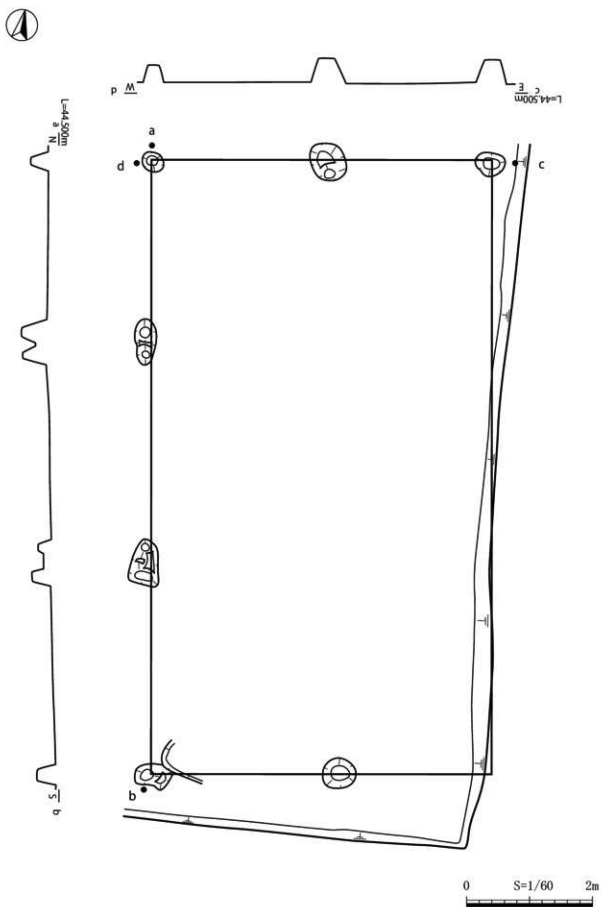
第6図 SI1 (S=1/40)、SB1、3 (S=1/60) 遺構図・断面図



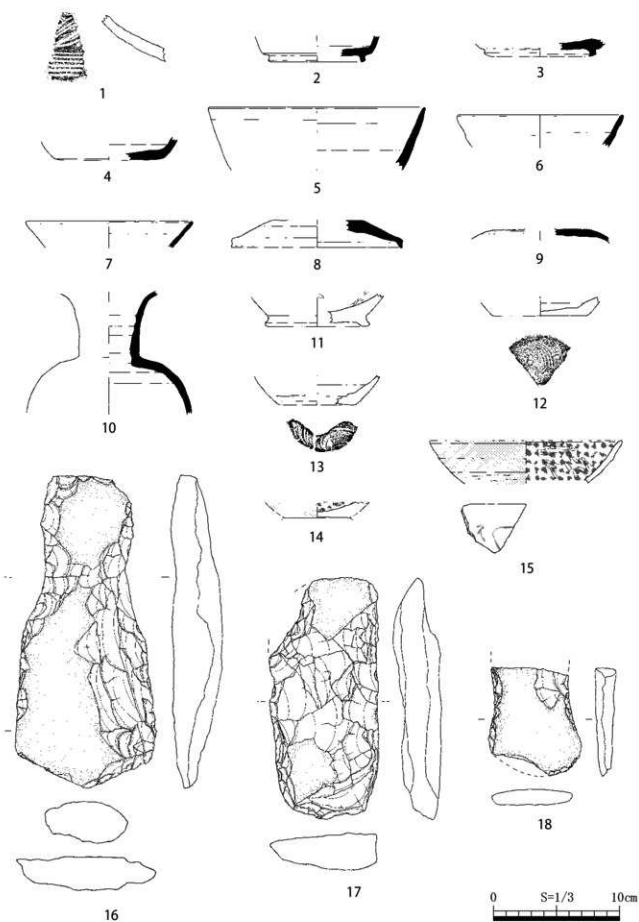
第7図 SB 2、4遺構図・断面図 (S=1/60)



第 8 図 SB5 遺構図・断面図 (S=1/60)



第9図 SB6遺構図・断面図 (S=1/60)



第10図 遺物実測図 (S=1/3)

第2表 土器観察表

番号	遺構	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	口径 (mm)	調整(外)		色調(外)		残存率	胎土 備考		実測 番号
						調整(内)		色調(内)					
1	P2	弥生 壺						にぶい黄褐色	小片		砂礫、石灰	15	
								にぶい黄褐色					
2	P3	須恵器 有台杯			76		ロクロナデ	灰色	1/6		砂礫 へう切り	5	
							ロクロナデ	灰色					
3	P7	須恵器 有台杯			89		ロクロナデ	灰色	1/3		砂礫、黒色粒(少量)	12	
							ロクロナデ	灰色					
4	P6	須恵器 杯			88		ヨコナデ	灰白色	1/3		砂礫、黒色粒 焼成不良、へう切り	14	
							ヨコナデ	灰白色					
5	SD1	須恵器 杯	172				ロクロナデ	灰白色	1/18		砂礫 外 重ね焼痕	17	
							ロクロナデ	灰白色					
6	P5	須恵器 杯	132				ロクロナデ	灰黄色	1/12		砂礫 外 重ね焼痕	18	
							ロクロナデ	灰黄色					
7	包含層	須恵器 杯	132				ロクロナデ	オリーブ黒、灰白色	1/12		砂礫 外 自然釉、重ね焼痕	7	
							ロクロナデ	灰黄色					
8	包含層	須恵器 蓋	かえし高 5		136		ロクロナデ	灰白色	1/12		砂礫 へう切り	8	
							ロクロナデ	灰白色					
9	包含層	須恵器 蓋					ロクロナデ	灰白色	小片		砂礫 へう切り	10	
							ロクロナデ	灰白色					
10	P4	須恵器 甕	頸部径 50				ロクロナデ	灰白色	頸部 完形 胴部 2/3		砂礫 外面に自然釉付着	11	
							ロクロナデ	灰白色					
11	包含層	土師器 有台塊			82		ヨコナデ	にぶい黄褐色	1/6		砂礫、黒色粒 へう切り	9	
							ヨコナデ、ミガキ	にぶい黄褐色					
12	包含層	土師器 埴			76		ナデ	灰黄褐色	2/9		回転糸切り痕	6	
							ナデ	黄褐色					
13	P8	土師器 埴			58		ヨコナデ	にぶい黄褐色、灰黄褐色	4/9		砂礫、黒色粒 内外 窪、回転糸切り痕	16	
							ヨコナデ	灰黄色、黄灰色					
14	包含層	土師器 埴			52		ナデ	黒黄色	1/6		砂礫	2	
							ナデ、ミガキ	黒色					
15	P1	土師器 埴	152				ヨコナデ、ケズリ	にぶい黄褐色、淡黄褐色	1/9		砂礫、黒色粒 内面-内黒、外面-赤影	13	
							ナデ、ミガキ	淡黄褐色、黒色					

第3表 石器観察表

番号	グリッド 遺構	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考	実測 番号
17	包含層	石鍬	193	88	39	745	火山礫凝灰岩	未成品	3
18	P3	石鍬	86	67	17	120	火山礫凝灰岩	刃部一部破壊、基部欠損	4



調査区北側全景 (西から)



SB 2 (北から)



調査区北側全景 (東から)



SB 3 (西から)



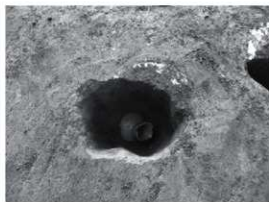
調査区南側全景 (東から)



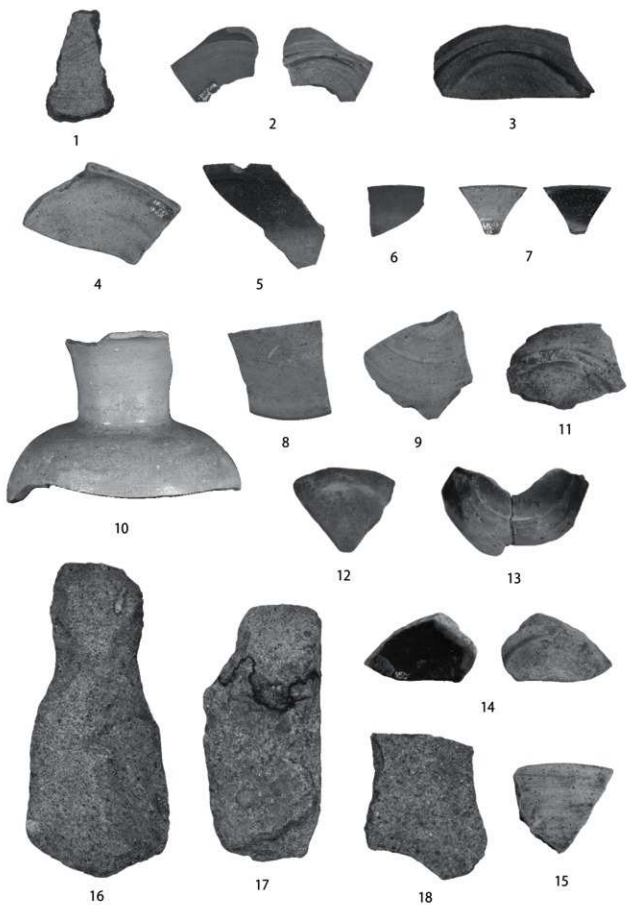
SI 1、SB 5、SB 6 (北から)



SI 1 (西から)



P 4 須恵器 10 出土状況 (東から)



報告書抄録

ふりがな	かんげやしいせき							
書名	上林遺跡2							
副書名	農産加工場建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	田村 昌宏							
編集機関	野々市市教育委員会							
所在地	〒921-8510 石川県野々市市三納一丁目1番地 Tel:076-227-6122							
発行機関	野々市市教育委員会							
発行年月日	西暦 2014年3月28日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カバヤンイセキ 上林遺跡	イシカワケン 石川県 ノイオン 野々市市 カバヤン 上林	17344	16001	36° 30′ 35″	136° 36′ 31″	2013.11.2 ～ 2013.12.26	760	記録 保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
上林遺跡	集落	弥生、古代		竪穴建物1、 掘立柱建物6、		弥生土器、須恵器、 土師器、石鍬		
要 約	上林遺跡は、弥生時代及び古代の集落跡を確認している。弥生時代は、遺物の確認だけであるが、石鍬の未成品が見つかっており、本遺跡で加工した可能性がある。古代は、竪穴建物1棟と掘立柱建物6棟を検出した。過年度に隣地で調査した成果を合わせると、古代の掘立柱建物は7棟となる。時期は8世紀後半～9世紀前半で、建物の重複や主軸の違いなどから3時期に小区分できる。							

2014年3月28日 発行

農産加工場建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
上林遺跡2

著作権所有 石川県野々市市三納一丁目1番地

発行者 野々市市教育委員会

印刷者 石川県野々市市矢作三丁目18
高桑美術印刷株式会社